

# 魅せられるもの

——一九八四年、いま、ここに——

## 河 辺 泉

数年前ヨーロッパの美術を訪ねた時、旅の終着点ローマで古代に出会い、心をゆさぶられたのを想い出すが、はからずも昨夏エジプトで短時日ではあったが、五〇〇〇年前の古代を目のあたりにすることができ、強烈な印象を受けて帰国した。

エジプトの中央を流れるナイル流域の黒い土（ケメト）と呼ばれるわずかな耕作地を除き、九七パーセントがなにもをも寄せつけない赤い土（デシレント）、つまり砂漠であ



るといふ大自然が古代エジプト人の思想や宗教等の独自の文明の形成に大きな影響があつたことはいなめない。広大なセピア色の砂漠を空から眺めた時も実地に果しなく続く砂漠の一端に立つた時も「砂漠はエジプト人の心の中に生きつづけている」といふ強い感動をおぼえた。それは天に続くような水平線の砂漠から昇り砂漠に没する太陽の明の世界と星空しか見えない冷たい闇の世界に「生と死」を、さらにナイルの洪水のあとに沃上が残されて耕地が再生されたことから「死と再生」を、それぞれ人間の輪廻転生の想念を深めていったに違いないと感じたからである。

さらに現世にまで残されて来た古代エジプトの遺跡の偉大さや未だなお謎につつまれた不可思議さに心をうたれると共に、それらの遺跡のほとんどが、耕作地と砂漠の境界（はざま）に存在することにもなにか人間の根源的な生き方にかかわりがあるようにも思われたことである。そこには制約ぎりぎりの中に自由なイメージや思索をいかに現実化していかかという絶えざる対決が宿命づけられて来たのではないだろうか。特にサッカーをはじめギザのピラミッドこそその最たるものと思う。対立するものの統合の最も美しい表現を曼荼羅と呼ぶが、私はこのピラミッドこそひとつの曼荼羅だと思つた。ヒエログリフ（聖刻文字）による碑文の発見をまつまでもなく、それは古代王朝の専制で実現されたものではなく、「天の神（祖先）への階段」といふ国王の夢が庶民の祈念ともなり歓喜と真剣な精進によつて現実化されていったに違いないと考へたい。そこに現代の科学すら及ばないものが実現されたのであろう。

首都カイロはホテルや商社や官庁などの近代的なビルを除いては建てているのかこわしているのかわからないような日乾煉瓦の街並みに黄色い砂塵と混雑する自動車の群、そこにはクラクションの響きがうずまいていた。この黄色い喧噪の世界に見たものはいきいきと呼び交わすたくましい人々の動きと昼の静かなひとときアカンヤの街路樹の蔭からひびいてくるコーランの祈りの声であった。大衆の活動的な生活は古代エジプトの生活が描かれた葬祭殿や墓の内部を飾るレリーフなどの壁画の中にも充分うかがうことができ、五〇〇〇年の古代がいまも現代に息づいているかのようにも感じられた。そこにあるものは太陽の力を得て洪水のあとの沃土から芽を吹く草木の再生にも似た人間のたくましい生命力そのものと生活というさまざまな形にあらわされたものであった。

これらは短時日にかいま見聞したエジプトの寸描であり、この見聞した事実になにも付記するものはない。ただ私にとって魅せられるものは何であるのか。それは大自然と共に生きる人間のいきいきしさであり、制約の中にかくも自由な自己の生命を生き現実化させて来たかという古代からのエジプト人たちの姿であり、その姿がそのまま、いま、ここに、土や泥や砂や水にまみれている幼児たちの姿と重なったことである。一九八四年の時を迎える。来る年も、きっと、もっと、幼児との生活や教育に喜びと真剣さをおぼえたいことを祈りたい。

(洗足学園短期大学)